

## 真の礼拝への招き

詩篇 95 篇の瞑想

キリスト教会は初期の時代からこの詩篇を礼拝への招きおよび手引きとして広く用いてきました。瞑想してみて、真の礼拝とはどういうものなのかを教えてください。聖書箇所だと感じました。

まず、最後の節「それゆえ、わたしは怒って誓った。「**確かに彼らは、わたしの安息に、入れない**」ここから考えてみることにします。「**安息に入れない**」この厳しい口調がとても気になるのです。

安息 メヌーハー 休むこと、憩い、憩いの場

「安息」という語は、旧約聖書で 21 回使われています。創世記、民数記、申命記、士師記、ルツ記には、それぞれ一回ずつ使用されています。これらの箇所だけでも、神のマスタープランが「暗号」のように示されていてとても興味深いです。

今回は、以下の聖書箇所を順次取り上げてみたいと思います。(1) 創世記 4 章 9 節 (2) 民数記 10 章 3 節 (3) 申命記 1 章 9 節 (4) 士師記 2 章 4 節 (5) ルツ記 1 章 9 節

### 1. 創世記 4 章 9 節

彼は、休息がいかにも好ましく、その地が、いかにも麗しいのを見た。しかし、彼の肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となった。

イッサカルは、ヤコブの第 9 子でレアがヤコブに産んだ 5 番目の子どもです。「報い、報酬」を意味するヘブル語の「サーハール」שָׂרָר があるのがその名前の由来です。レアが「主は私に報酬をくださった」と言ったのが、イッサカル族の開祖です。

1 4 節「イッサカルはたくましいろばで、彼は二つの鞍袋の間に伏す。」この「たくましいろば」という表現は、I 歴代誌 1 2 章 3 2 節「イッサカル族から、時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている彼らのかしら二百人。」について言っている聖句と思われる。「二百」という数字は、ヘブル語のレーシュ (ר) のゲマトリアです。レーシュ (ר) は「かしら、思考、考え」という意味のあるヘブル文字です。

「二つの鞍袋」、口語訳は「羊のおり」になっています。複数形 **מִשְׁפָּטִים** ミシュペタ イーム 単数形は **מִשְׁפָּת** ミシェパート (鞍) という意味の他に (家畜のおり) という意味があります。私は口語訳の「羊のおり」がいいように思います。なぜなら、申命記3章18節「**イッサカルよ。あなたは天幕の中にいて。**」とあります。ヘブル語で見ると、**יִשְׁכַּר בְּאֹהֶלֶיךָ** イッサーカール ベオーハーレイハー [イッサカル、あなたの天幕で(喜べ)] です。預言的な聖句と言えます。**אוֹהֶל אֱלֹהִים** オーヘル 天幕 はエデンの園をイメージしているからです。

また、**מִשְׁפָּת** ミシェパート は、

メーム **מ** 真理

シン **ש** 神

ペー **פ** 言葉

ターヴ **ת** 完成

[神の真理の言葉の完成]です。「羊のおり」は神のマスタープランの最終章である「新天新地」であり「回復されたエデンの園」と言えます。 [イッサカル、あなたの天幕で(喜べ)] 信仰者の「よろこび」は「エデンの園の回復」以外にありえません。

ここまで、見えてきたことを整理します。

イッサカルは「イスラエルの象徴」として登場していると考えます。「羊のおり (回復されたエデン) の間に伏す、たくましいろば」 神様はそのような者としてイスラエルをお選びになりました。「**イスラエルがなにをなすべきか知っているかしらなる二百人**」、つまり、かしらなるお方、主と同じ考え、主と一体となる民族として彼らを選んだのです。「しかし、彼の肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となった。」とあるように、その道を彼らはやがて辿るのです。

イザヤ書28章12節

主は、彼らに「ここにいこいが **מְנוּחָה** ある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みがある」と仰せられたのに、彼らは聞こうとはしなかった。

イザヤ書66章1節

【主】はこう仰せられる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか。わたしのいこいの場は **מְנוּחָה**、いったいどこにあるのか。

イスラエルへの神の悲しみと怒りが込められている聖句です。詩篇95篇 それゆえ、わたしは怒って誓った。「**確かに彼らは、わたしの安息に、入れない**」と。この聖句とリンクする聖書箇所と言えます。

## 2. 民数記10章33節

こうして、彼らは【主】の山を出て、三日の道のりを進んだ。【主】の契約の箱は三日の道のりの間、彼らの先頭に立って進み、彼らの休息の場所を捜した。アンダーラインのヘブル語は、

メヌーハー ラーヘム トール  
מְנוּחָה לָהֶם תּוֹר  
休息 ~に関して 捜す、調べる

תּוֹר トール（探る、捜す、調べる） 名詞形は תּוֹרָה トーラーです。  
トーラーはイエシュアです。 申命記12章9節とリンクさせて考察すると、

## 3. 申命記12章9節

あなたがたがまだ、あなたの神、【主】のあなたに与えようとしておられる相続の安住地（מְנוּחָה メヌーハー）に行っていないからである。

今現在のユダヤ人の状況、また多くの教会の状況と言えます。目が開かれていないので神様のマスタープランがわからないのです。「トーラーはイエシュアです」ときっぱりと言いつける状況にないのです。申命記12章8節「あなたがたは、私たちがきょう、ここでしているようにしてはならない。おのおのが自分の正しいと見ることを何でもしている。」このような状況と言えるのかもしれませんが。

「三日の道のり」、イエシュアが主との美しい関係を絶たれてしまう暗闇の内にも、主は私たちの先頭に立って進みました。それは、ひとり子イエシュアを十字架に掛ける、という主にとっても大きな悲しみであったはずです。相続の安住地（מְנוּחָה メヌーハー）エデンの園を回復させるためです。

民数記10章33節「彼らの休息の場所を捜した」ここに「捜した」とあることに注目したいです。「捜す」の意味は「見えなくなったものを見つけ出す行為」です。見えなくなったものは「トーラーの中にあるよ。見つけ出しなさい」と神様がおっしゃっているような聖書箇所ではないでしょうか。（口語訳は、尋ね求めた）

## 4. 士師記20章43節

イスラエル人はベニヤミンを包囲して追いつめ、ヌア (מְנוּחָה) から東のほう (מִזְרֵחַ שֶׁמֶשׁ)  
ギブアの向こう側まで踏みにじった。アンダーラインのヘブル語は、

メヌーハー	ギブア	シェメシュ	ミズラー
מְנוּחָה	גִּבְעָה	שֶׁמֶשׁ	מִזְרֵחַ
安息	ギブア	太陽	昇るところ

ヌアのヘブル語が、[מְנוּחָה メヌーハー]になっていたのが発見です。  
ギブア גִּבְעָה ג (ギメル) は「自由意思 (からくる懲罰)」という意味のあるヘブル文字で  
す。ב (ヴェート) 「国」 ע (アイン) 「目」 ה (ヘー) 「見る」 神の意思ではなく自  
分の思いで (自由意思で) 「国」を見てしまう町、というヘブル的な意味が込められてい  
ます。イスラエルは実際、このように墮落していました。士師記 19 章、ギブアのおぞま  
しい物語・・・私は、この士師記 20 章 4 3 節を瞑想して、ギブアの物語がとても「預言的」  
なものに思えてきました。 要点をかいつまんで説明します。

士師記 19 章 25、26 節  
25 節 しかし、人々は彼に聞こうとしなかった。そこで、その人は自分のそばめをつか  
んで、外の彼らのところへ出した。すると、彼らは彼女を犯して、**夜通し、朝ま  
で暴行を加え、夜が明けかかるころ彼女を放した。**  
26 節 **夜明け前に、その女は自分の主人のいるその人の家の戸口に来て倒れ、明るくな  
るまでそこにいた。**

この「そばめ」はイエシュアを象徴しているように思えるのです。イエシュアは、父のみ  
こころがなりますようにと十字架を耐え忍んだお方です。御父との交わりが完全に断たれ  
てしまう「三日間」は「暴行」と言えるほどの苦痛です。ブルーのラインは「イエシュア  
の三日間」を思わせます。「主人、つまり主のいる (神の国) の戸口に倒れ、**明るくなる  
までそこにいました。**

イスラエルの一日は夕方から始まります。「夕があり朝があった」

ヘブル人の時間感覚、神の支配感覚は、「夕があり、朝がある」というリズムです。  
したがって、**明るくなる**「朝」が来るということは、ヘブル的な「希望」につながると言  
えます。[מְנוּחָה メヌーハー 神の安息][エデンの園の回復] です。その「希望」は十字  
架により完成するのです。

ギブアの事件は「こうして、**彼らは進んで行った。彼らがベニヤミンに属するギブアの  
近くに来たとき、日は沈んだ。** (士師記 19 章 1 4 節)」とあるように「夕」を象徴して

います。もう一度、20章43節 ヌア (מנוחה) から東のほう (משמך מזרח) ギブアの向こう側まで のヘブル語を見てください。

メヌーハー	ギブア	シェメシュ	ミズラー
מְנוּחָה	גִּבְעָה	שֶׁמֶשׁ	מִזְרָח
安息	ギブア	太陽	昇るところ

ギブア=墮落した町、墮落した民、はイエシュアの十字架により「太陽の昇るところ」となり[מְנוּחָה メヌーハー] 安息の地となる・・・しかし彼らはその神の思いをまだまだ踏みにじっているのです。

士師記19章28、29節

28節 それで、彼はその女に、「立ちなさい。行こう」と言ったが、何の返事もなかった。それで、その人は彼女をろばに乗せ、立って自分の所へ向かって行った。

29節 彼は自分の家に着くと、刀を取り、自分のそばめをつかんで、その死体を十二の部分に切り分けて、イスラエルの国中に送った。

ここは、イザヤ書53章のイエシュアを思わせます。

「(イエシュアの) 死を十二の部分に切り分けて」、十二という数字は神が望む「完全」を意味します。御父と御子イエシュアの「完全」な苦しみであり、目的達成のための「完全」なみわざと言えます。イスラエルはこのことを受け取る必要があるのです。

## 5. ルツ記1章9節

あなたがたが、それぞれ夫の家で平和な暮らしができるように【主】がしてくださいませように」と言った。そしてふたりに口づけしたので、彼女たちは声をあげて泣いた。

「平和な暮らし」に[מְנוּחָה メヌーハー] が当てられています。新共同訳は「どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」となっています。イスラエルと異邦人が主の花嫁となり主の安息に入っていく、という神のマスタープランの最終章を思わせる聖句です。

イザヤ書11章10節

その日、エッサイの根は、国々の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のいこう所は栄光に輝く。

神のマスタープランの最終章と言える千年王国について語っています。「彼のいこう所 מְנוּחָה メヌーハー」そこは栄光に輝く王国です。

詩篇で、[מְנוּחָה メヌーハー] は4回使われています。95篇11節の他には、23篇2節、132篇8節、14節です。

詩篇23篇2節

主は私を緑の牧場に伏させ、**いこい**の水のほとりに伴われます。

詩篇132篇8節

【主】よ。立ち上がってください。あなたの**安息の場所**に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も。

詩篇132篇14節

「これはとこしえに、わたしの**安息の場所**、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。

23篇の「いこいの水のほとり」は「主の安息の場所」であることがわかります。

次にエレミヤ書を見てみます。[מְנוּחָה]メヌーハー] は2回使われています。(45章3節、51章59節)

エレミヤ書51章59節

59節 マフセヤの子ネリヤの子セラヤが、ユダの王ゼデキヤとともに、その治世の第四年に、バビロンへ行くとき、預言者エレミヤがセラヤに命じたことば。そのとき、セラヤは**宿営の長**であった。

メヌーハー サル セラヤ

מְנוּחָה שָׂר שָׂרְיָה

宿営 頭、指導者 セラヤ

ここで、[מְנוּחָה]メヌーハー]は「宿営」と訳されています。60節以下から、この「宿営」は「教会」と考えることも可能かもしれません。

60節 エレミヤはバビロンに下るわざわいのすべてを一つの巻き物にしるした。すなわち、バビロンについてこのすべてのことばが書いてあった。

61節 エレミヤはセラヤに言った。「あなたがバビロンに入ったときに、**これらすべてのことばをよく注意して読み、**

6 2 節 『【主】よ。あなたはこの所について、これを滅ぼし、人間から獣に至るまで住むものがないようにし、永遠に荒れ果てさせる、と語られました』と言い、  
 6 3 節 この書物を読み終わったなら、それに石を結びつけて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、  
 6 4 節 『このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいのためだ。彼らは疲れ果てる』と言いなさい。」ここまでが、エレミヤのことばである。

バビロンは「この世」の象徴です。セラヤ には「神の戦士」という意味があり、預言者エレミヤの弟子、バルクの兄弟でした。「預言者」として神の「みことば」を預かっている者は、それを正確に伝えなくてはいけないのです。「バビロンは沈み、浮かび上がれない」この聖句が意味するところの神のマスタープランを、みことばをよく注意して読み正確に伝えなくてはいけないのです。しかし、現在の教会の状況の多くは、それが成されていないようです。

ハーエレー ハッデヴァーリーム コール エット ヴェカーラター ヴェラーイター ヴァーヴェル

הָאֱלֹהִים      כָּל-הַדְּבָרִים      אֵת      וְקִרְאתָ      וְרָאתָ      בָּבֶל

これらの      ことば（複数）それぞれを      読む、告げる      理解する      バビロン

聖書の言う「理解する」רָאָה（ラーアー）とは、「神の思考、考えを見る」ということです。バビロンが象徴する「この世」にあって見えなくなってしまったものを、聖霊の助けによって見つけ出す行為であり、それが「礼拝」と言えると思います。主の思いを知ることなく主を賛美することは偶像礼拝と言えるかもしれません。

エレミヤの時代は、現在のようにすべての信仰者が聖書を持つという時代ではありませんでした。ですから「預言者」には厳粛な責任が課せられていました。ですが、現代の信仰者には手元に「聖書」があります。クリスチャンすべてが「預言者」と言えるのではないのでしょうか。みことばに厳粛に向き合い、「神の思考、考えを見る」ことはクリスチャンの日常と言えます。「みことばを読んで理解して、告げる」ことはすべてのクリスチャンの賜物だと思うのです。「宿営の長セラヤ」は特別な人のことではなく、「私自身」と受け止めるべき時代と言えると思います。

I 歴代誌 2 8 章 2 節  
 ダビデ王は立ち上がって、こう言った。「私の兄弟たち、私の民よ。私の言うことを聞きなさい。私は【主】の契約の箱のため、私たちの神の足台のために、安息の家を建てる志を持っていた。私は建築の用意をした。」

メヌーハー ベイト リヴェノート レヴァーヴィー

לְבַבִּי לְבָנוֹת בֵּית מְנוּחָה

安息 家 建てる、確立する 心

「神の安息の家を建てる心」それが真の礼拝の心と言えます。

#### I 列王記 8 章 5 6 節

「約束どおり、ご自分の民イスラエルに安住の地をお与えになった【主】はほむべきかな。しもベモーセを通して告げられた良い約束はみな、一つもたがわなかった。

ソロモン王の言葉です。ソロモン王はイエシュアの型であった方ですから、この聖句は神の思いと一致したイエシュアのことばと言えます。真の礼拝は、この神の思いと一つになることです。

#### イザヤ書 3 2 章 1 8 節

わたしの民は、平和な住まい、安全な家、安らかないこの場 מְנוּחָה メヌーハーに住む。

真の礼拝とは、神のこの声を聞くことです。どういう状況ににあっても、「この状況を改善してください」と主に願うのではなく、毎日この声を聞き続けて主の祝福を受け取るのです。

#### 詩篇 9 5 篇 1 - 7 節

- 1 節 さあ、【主】に向かって、喜び歌おう。われらの救いの岩に向かって、喜び叫ぼう。
- 2 節 感謝の歌をもって、御前に進み行き、賛美の歌をもって、主に喜び叫ぼう。
- 3 節 【主】は大いなる神であり、すべての神々にまさって、大いなる王である。
- 4 節 地の深みは主の御手のうちにあり、山々の頂も主のものである。
- 5 節 海は主のもの。主がそれを造られた。陸地も主の御手が造られた。
- 6 節 来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、【主】の御前に、ひざまずこう。
- 7 節 主は、私たちの神。私たちは、その牧場の民、その御手の羊である。きょう、もし御声を聞くなら、

主は[מְנוּחָה מְנוּחָה 安息]の中におられるお方です。私たちもそこに入って行かなければ、主の御前にひざまずくことはできません。「きょう、もし御声を聞くなら」です。「もし」אִם イム（接続詞）には・・・すればよいのに、という意味もあります。御声を聞け



ばよいのだが・・・という神様の思いが込められているのではないのでしょうか。あえて、「もし」を入れているように感じます。

女性名詞 **אָנח** エム には (道の) 分岐点、という意味があります。「**確かに彼らは、わたしの安息に、入れない**」このみことばは、非常に重いのです。主の御前にひざまずける信仰者となれるかどうか、私たちは常に分岐点に立っているのかもしれない。

I コリント 10 章 1 - 5 節

- 1 節 そこで、兄弟たち。私はあなたがたにぜひ次のことを知ってもらいたいです。私たちの父祖たちはみな、雲の下におり、みな海を通過して行きました。
- 2 節 そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、
- 3 節 みな同じ御霊の食べ物を食べ、
- 4 節 みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。
- 5 節 にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、**荒野で滅ぼされました。**

モーセはイエシュアの型です。そのバプテスマとは、イエシュアによるバプテスマのことです。「荒野」**מִדְּבָר** ミドゥバールとは「語る、告げる」を意味する動詞「ダーヴァル」(**דָּבַר**)に、前置詞ではなく、接頭辞の「メーム」という<sup>1</sup>字がついて名詞化された語彙です。だれが「語る」のかと・えば、神です。つまり、「荒野」を意味する「ミドゥバール」とは、神の民が「神の語りかけを聞く場所」「神のみことばを聞き、それによって養われる場所」を意味します。そこで滅ぼされる者たちもいるのです。神の声を聞くか聞かないか、分岐点です。

「メヌーハー」(**מְנוּחָה**)も同様です。動詞の「とどまる、休む」を意味する「ヌーアッハ」(**נָח**)に接頭辞の「メーム」がついて名詞化されて「安息」となっています。

ヨハネの福音書 15 章 5、6 節

- 5 節 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。**人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、**そういう人は**多くの実を結びます。**わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
- 6 節 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

この聖書箇所は、詩篇 95 篇の「解説」と言えます。イエシュアに (**נָח** ヌーアッハ) とどまる者、イエシュアがとどまって (**נָח** ヌーアッハ) くださる人、それは、

[מְנוּחָה] メヌーハー] 神の安息の中に入る人です。神のご計画に寄り添った（従った、聞き従った）祝福の結果です。「多くの実を結びます」とは、たくさんの素晴らしい成果を上げるということではなく「神のご計画に寄り添った者」と言えるのではないのでしょうか。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」とても有名で、常に多くの信仰者に安らぎと感動を与えて来た聖句です。詩篇95篇と同じように。

正確には「わたしはぶどうの木で、今日、もし御声をきくなら、あなたがたは枝です」

ティシエマー ベコール イム ハッヨーム  
תִּשְׁמְעוּ אֶם-קוֹל הַיּוֹם  
聞くなら 声、雷 もし 今日、生涯

ヘブル語からわかるように、「声」קוֹל (コール) には「雷」という意味もあります。ただ美しいことばに酔って主を賛美するのではなく、「確かに彼らは、わたしの安息に入れない」「人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます」という神様の「雷鳴」のようなことばについても、よく聞いて理解する必要があります。「トラー」である方、イエシュアを礼拝し、真の礼拝への招きに応じる私たちの姿勢です。

## 瞑想を終えて

自分が「神のご計画に寄り添った」信仰者なのかどうか、自分ではわかりません。それは神様が決めることなので、高望みをする必要も自己卑下してしまう必要もないと思うのです。ただ、うれしいのです。聖書を瞑想すればするほど、神様のご計画がうれしいです。私には何の力もないけれど、主の安息の中に入って永遠の命を得る人たちが確かに存在する、ということがうれしいです。エデンの園が回復する日が来ると知ることは大きな希望です。「さあ、主に向かって、喜び歌おう」とほんとうに心から喜びが湧き上がってくるのです。ダビデのように「安息の家を建てる志を持っていた。私は建築の用意をした」このような思いで、日々、みことばと向き合い、主を賛美したいと思います。そうすることが真の礼拝であり、御国を建て上げる「用意」なのだと思えます。

西川 徳子